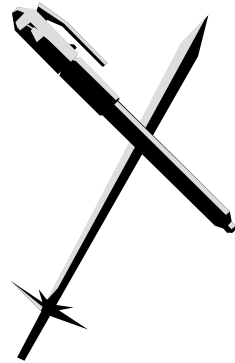


第1章

パーシー、

数学の先生を消してしまう



おれだって望んでハーフに生まれたわけじゃない。

もし君が、自分もハーフかも、と思ってこの本を読んでいるなら、すぐにこの本を閉じること。そして、親が君の生まれについて語る嘘を信じて、ふつうの生活を送ること。

ハーフは危険な目にあう。恐怖きょうふの連続だし、たいいていの場合、苦しい、いやな死に方を
する。

君がふつうの子で、この本を作り話と思って読んでいるなら、けっこう。どんどん読んでほしい。この本のなかみがどれも作り話だと思えるなんて、うらやましい。

けど、もしこの本を読んでいて思い当たるところがあるなら——みょうな胸騒むなさわぎがするなら——すぐに読むのをやめること。君もハーフかもしれない。しかも、自分でそれに気づい

てしまったら、「やつら」が気づくのも時間の問題。君をさがしにくる。

おれはちゃんと警告したぞ。

おれの名前はパーシー・ジャクソン。

現在、十二歳^{さい}。数カ月前まではヤンシー学園の生徒だった。ヤンシーはニューヨークの北部にある、問題児専門の私立の寄宿学校だ。

おれが問題児かって？

まあ、みんなそう思っているだろうな。

自分の短くみじめな人生からどこを取りだしても、それを証明できる。けど、ほんとうにやばいことになり始めたのは今年の五月。おれたち六年生全員が校外授業でマンハッタンに行ったとき——問題児ばかり二十八人の生徒と先生ふたりが、黄色いスクールバスに乗って、メトロポリタン美術館に行った。古代ギリシャとか古代ローマのいろんなものを見るに。

そうなんだ——拷問^{ごうもん}だろ。ヤンシーの校外授業のほとんどは拷問だ。

けど、この校外授業の引率は古典のブラナー先生だった。だから、ちょっと期待していた。ブラナー先生は中年の男の先生で、電動車椅子^{でんどうくるまいす}に乗っている。頭が薄^{うす}くて、ひげもじゃ。コーヒーのにおいのしみついた、すり切れたツイードのジャケットを着ている。スマートな

先生とはいえないけど、授業中に雑談をしたり、おもしろいことをいったり、クラスみんな
でゲームをさせてくれたりする。ブラナー先生は古代ローマ時代のよろいかぶととか武器と
かのすごいコレクションも持っている。おれもこの先生の授業だけは眠くならない。

だから、今回の校外授業はだいじょうぶだろう、少なくとも、今回だけは問題が起きない
だろうと思っていた。

けど、大はずれ。

そうなんだ、校外授業に行くとき必ず問題が起きる。例えば、五年生のときに通っていた学
校でサラトガ戦場跡せんじょうあとに行つたときは、独立戦争で使われた大砲たいほうで大失敗した。スクールバ
スをねらつたわけじゃなかったのに、やっぱり退学になった。で、その前は四年生のときに
通っていた学校でマリンワールド水族館に行つて、サメの水槽すいそうの作業を見にいったとき。ク
ラス全員が水槽の上に渡された通路にいるときに、おれが触さわっちゃいけないレバーにちよつ
とぶつかつて、全員が予定外の水泳をすることになった。で、その前は……まあ、あとは想
像におまかせ。

今回の校外授業では、おとなしくしているつもりだった。

ニューヨークの街に着くまでずっと、ナンシー・ボボフィットにもがまんした。髪かみの毛は
真っ赤で顔はそばかすだらけ、盗み癖ぬすぐせのあるナンシーは、おれの親友グローバーの頭のうし

ろに、ピーナッツバター&ケチャップサンドイッチをちぎってはぶつけていた。

グローバーはすぐにいじめの標的にされる。グローバーはやせっぽちで、どうしていいかわからなくなると泣きだす。何度か留年しているはずだ。六年生で顔にきびがあつて、あごにうつすらとひげが生えてきているなんてグローバーだけだ。そうそう、グローバーは脚が悪い。両脚の筋肉が何かの病気で、一生体育の授業に出なくていい、って許可されている。歩くときは一步ごとに脚が痛いみたいな変な歩き方をする。けど、だまされちゃいけない。カフェテリアのメニューにメキシコ料理のエンチラーダがあるときの、あいつの走りっぷりを見せてやりたい。

それはそうと、グローバーの茶色い巻き毛のあちこちに、ナンシーがぶつけたサンドイッチの切れ端がからみついていた。けど、ナンシーはおれがやり返せないのを知っていた。おれは執行猶予期間中。校長から、もしこの校外授業中に騒ぎを起こしたら、それが愉快なことだったとしても停学だ、とおどされていた。

「あいつ、殴り倒してやる」おれはつぶやいた。

グローバーはおれを落ち着かせようとした。「いいんだ。ほく、ピーナッツバター、好きだから」

グローバーはひょいっと、また飛んできたナンシーのサンドイッチをよけた。

「だろうな」おれは立とうとしたところでグローバーに椅子いすに引きもどされた。

「執行猶予しつこうゆうよ中でしょ」グローバーは念ねんを押した。「何かあったら自分のせいになるのは、わかってるでしょ？」

今思うと、あのときあの場でナンシーをぶん殴なぐっておけばよかった。停学なんて、これから話す騒動そどうとくらべたらなんでもなかった。

ブラナー先生について美術館を見学した。

車椅子に乗った先生を先頭に、おれたち六年生は、やたらと響ひびきのいい、大きな展示室をいくつも見た。大理石の像とか、めちゃくちゃ古い黒とオレンジ色のつぼがいっぱい並んでるガラスケースとかがいくつもあった。

ふと、これって二千年も三千年も昔のものなんだよな、と思った。

先生にいわれてみんな石の円柱のまわりに集まった。高さが四メートルくらいあって、上には大きなスフィンクスがのっている。先生が、これは君たちと同じくらいの歳としの女の子のために作られた墓石、ステラだ、と説明を始めた。柱の表面の彫り物ものの説明もしてくれた。おれは先生の話はなしに耳をかたむけた。なんだかおもしろそうだったから。けど、まわりはみんなしゃべってばかりいる。「静かにしろよ」というたびに、おれはもうひとりの引率の先生、

ドッズ先生ににらまれた。

ドッズ先生はジョージア州出身の小柄な女の先生で、数学を教えている。もう五十歳くらいなのに、いつも黒い革のジャケットを着ている。不良っぽくて、ハーレーに乗って生徒のロッカー室につっこんできそうな感じだ。ドッズ先生は新学年が始まって何カ月かしてヤンシーに来了。それまでいた数学の先生がノイローゼになったからだ。

ドッズ先生は初日からナンシー・ボボフィットを気に入って、おれを毛嫌いだ。かぎづめみたいに曲がった人さし指でおれをさして、「さあ、わかっているわね」と、甘い甘い声でいう。つまり、これから一カ月間放課後居残り、ってことだ。

一度なんか、ドッズ先生に真夜中まで、古い数学の問題集の答えを消しゴムで消させられた。そのあとでグローバーに「あれは人間じゃないな」っていったら、グローバーはおれのことを真剣そのものの顔で見つめて、「ぼくも絶対そうだと思う」といった。

ブラナー先生はギリシャの葬式について説明をつづけている。

そのとき、ナンシー・ボボフィットがステラの裸の男の彫刻を見て下品にくすぐす笑った。おれはふりむいていった。「うるさい」

そんなに大きな声を出したつもりはなかった。

クラスの全員が笑った。ブラナー先生は説明をやめた。

「ジャクソン君」ブラナー先生がいった。「何かいいたいことがあるのかな？」

おれは真っ赤になった。「いいえ、ちがいます」

ブラナー先生はステラに彫^ほられた場面のひとつを指さした。「君ならこれが何を表しているかわかるだろう？」

おれはそれをじっと見て、そして、ほっとした。ちゃんとわかったからだ。「ゼウスの父親クロノスが子どもたちを食べているところ、ですか？」

「そうだ」先生の表情から、その答えではまだ足りないのがわかる。「クロノスが子どもを食べたのは……」

「えーっと……」おれは神経を集中させて思い出そうとした。「クロノスは神々の王で、それで――」

「神々といっても、クロノスはゼウスたちとはちがうんだが、それは知っているかね？」ブラナー先生聞いた。

「はい。ゼウスやヘラより前の神々はタイタン族と呼ばれています」おれはいった。「で……クロノスは、神である自分の子どもたちを信用していませんでした。だから、その、クロノスは自分の子どもたちを食べた、ですよ？　けど、クロノスの妻は生まれたばかりのゼウスを隠^{かく}して、クロノスには代わりに石を飲みこませました。何年もたって、大人になった

ゼウスは父親のクロノスをだまし、きょうだいたちを吐き出させました——」

「気持ちわるー！」うしろにいた女子がいった。

「——そうして、神々とタイタン族のあいだの激しい戦いが始まりました」おれは話しつづけた。「そして、神々が勝ちました」

何人かがくすくす笑った。

うしろのほうで、ナンシーが友だちにひそひそいっている。「神話なんか実生活で役に立つわけないのにね。就職試験に出るとでも思ってるんじゃない？」『クロノスがわが子を食べた理由を説明せよ』とかさ」

「では、ジャクソン君」ブラナー先生がいった。「ボボフィット君からの素晴らしい質問を少しいかえて、神話は実生活において重要だろうか？」

「ほら、聞かれてた」グローバーがつぶやいた。

「うるさいわね」ナンシーが小声でいった。顔が髪の毛より真っ赤になっている。

少なくとも、ナンシーもブラナー先生にしかられた。ナンシーのにくまれ口を注意するのはブラナー先生だけだ。ブラナー先生の耳はリーダーみたいだ。

おれは質問を考えて、肩をすくめた。「わかりません」

「そうか」ブラナー先生は残念そうな顔をした。「それでは、ジャクソン君には五十点だ。

ゼウスがクロノスにマスタードとワインを混ぜたものを食べさせたところ、クロノスは五人の子どもを吐き出した。五人とももちろん、不死の神々だったために、クロノスのおなかの中でも消化されず、ちゃんと大人に育っていた。ゼウスはきょうだいの神々とともに、父親クロノスを倒し、クロノスが持っていた大鎌でクロノスを切り刻み、それをタルタロスにまき散らした。タルタロスは冥界にある、いちばん暗い場所だ。めでたしめでたし、ということで、昼食の時間にしよう。ドッズ先生、みんなを外に案内してくれますか？」

みんなばらばらになった。女子はすきっ腹に手をあて、男子はおたがいに押しあいながらふざけている。

おれとグローバーもみんなについて行こうとしたら、ブラナー先生に呼びとめられた。「ジャクソン君」

やっぱり来たか。

グローバーに、先に行つてくれ、といつてから、おれはブラナー先生のほうをむいた。「なんですか？」

ブラナー先生はいつもの、生徒にいやといわせない顔つきだった——茶色い瞳で、何千年も生きて何もかもお見通し、つて感じの厳しい視線で人を見る。

「さっきの質問に対する答えを考えておきなさい」ブラナー先生はいった。

「タイタン族のことですか？」

「実生活についてだ。君の学んだことを、実生活にどう役立てるか、ということだ」

「はあ」

「君が古典の授業で学んだことは、君の生死を左右する。それをよく肝に命じておくことだ。パーシー・ジャクソン、君はもつとがんばれるはずだ」

おれは怒りたいくらいだった。先生はおれに期待しすぎだ。

ていうか、たしかに、数日間の勝ち抜き戦はけっこうおもしろい。先生は古代ローマのよろいかぶとを身にまとい、大声で「突撃！」と叫びながら、剣先にチョークを刺して、生徒たちに問題を出す。おれたちは黒板のところに走って行って、歴史に出てきた古代ギリシヤや古代ローマの人の名前、その人々の母親の名前、その人が信じていた神の名前を書けるだけ書く。けど、ブラナー先生はおれにもみんなと同じことをやらせる。おれは難読症（訳注：文字を読んだり表現したりするのに不自由さを感じること）で、注意欠陥多動性障害（ADHD）で、生まれてから一度もCマイナスよりいい成績をとったことがないっていうのに。いや——同じことをやらせるだけじゃない。みんなを超えろ、っていう。おれには名前も出来事も完璧に覚えられないんだから、それを正しく書くなんて無理なのに。

おれが、もつとがんばってみます、とかなんとかもごいっていると、ブラナー先生は

悲しげな顔でステラを見つめていた。まるで、その女の子の葬式に出たことがあるみたいな表情だった。

先生はおれに、おもてに出て昼食を食べてきなさい、といった。

クラスみんなは美術館の前の階段のあちこちでお昼を食べていた。そこからは五番街を行き交う人や車が見えた。

空を見ると、嵐あらしになりそうだった。ニューヨークの空にこんな真つ黒な雲がかかっているのは初めて見た。たぶん、地球温暖化かなんかのせいだろう。クリスマスからずっとニューヨークの天気は不気味な感じだ。大雪が降ったり、洪水こうすいになったり、落雷らくらいで山火事が起こったりしている。今ハリケーンが来てる、って聞いても驚おどろいたりしない。

ほかのだれも天気のことなんか気にしていないみたいだった。男子が何人か、ハトにクラッカーをぶつけている。ナンシーが女の人のポケットから何かするうとしてるのに、もちろん、ドッズ先生はちつとも気づいてない。

おれとグローバーはみんなと離はなれて噴水ふんすいの縁ふちに座った。そうすれば、おれたちが「あの」学校の生徒とは思われないだろう、と思ったから——ほかの場所では何もできない負け犬学校負け犬学校の生徒だとは。

「居残り？」グローバーがいった。

「いや。ブラナー先生は居残りはさせない。だけど、あの先生おれをほっといてくれないかな、つてときどき思うんだ。ていうか——おれ、天才じゃないし」

グローバーはしばらく黙ったままだった。で、そろそろ何か難しい哲学的なことをいっておれをなぐさめてくれるんじゃないかな、と思ったところでこういわれた。「そのリング、もらっていい？」

おれはあまり食欲がなかったから、グローバーにリングをやった。

五番街をタクシーがつぎつぎと走っていく。それを見ていて、母さんがいるアパートのことを思った。おれが今、座っていることから、少し郊外（こうがい）に行つたところにある。母さんにはクリスマスから会っていない。無性にタクシーに飛び乗って、家に帰りたくなった。母さんはおれを抱きしめて、会えてうれしい、つていうだろう。けど、がっかりもするだろう。すぐにおれをヤンシーに帰らせて、もつとがんばらなきゃだめよ、つていうだろうな。この六年間でおれの通つた学校はヤンシーが六校目で、そのうちにまた退学になるとしても。母さんの悲しそうな顔は見たくない。

ブラナー先生は車椅子（くるまいす）に乗つたまま、車椅子用のスロープの下にいた。セロリをかじりながらペーパーバックの小説を読んでいる。車椅子のうしろに赤い傘（かさ）がさしてある。移動式

のカフェのテーブルみたいだ。

おれが自分のサンドイッチの包みをあげようとすると、ナンシーがぶさいくな友だち連れでおれたたちの前に現れた——観光客からスリをするのにあきたんだろう——そして、食べかけのサンドイッチをグローバーの膝ひざの上に落とした。

「あら」ナンシーはおれの顔を見てにやにや笑った。歯並びは悪いし、そばかすはオレンジ色のスプレーをかけたような色だ。

おれは冷静にしていようと思った。カウンセラーの先生から何万回も「十数えて、怒いかりをしずめなさい」といわれた。けど、むちゃくちゃ頭に来て、頭の中が真っ白になった。耳の奥おくで大波が轟ごう音を立てた。

ナンシーに触さわった覚えはない。けど、気づいたら、ナンシーが噴水ふんすいの中でしりもちをついて、わめいていた。「パーシーがつき飛ばした!」

ドッズ先生がすぐに飛んできた。

生徒が何人かひそひそいっている。「見た?——」

「——水が——」

「——ナンシーをつかんで——」

みんなが何をいっているのかわからなかった。たしかなのは、自分がまた問題を起こした、

ってことだけ。

ドッズ先生は、かわいそうなナンシーちゃんが無事なことをたしかめ、美術館の売店で新しいシャツを買ってあげるから、と約束などをすませたとたん、今度はおれを責める番になった。ドッズ先生の目には勝利の炎が燃えている。私が今学期中ずっと待っていたことをよくやってくれたわね、とでもいうかのように。「さあ、わかっているわね」

「わかつてます」おれはふてくされていった。「一カ月間、問題集の答え消し」
まずい答え方をしてしまった。

「私といっしょにいらつしやい」ドッズ先生がいった。

「待って！」グローバーがかん高い声でいった。「ぼくです。ぼくが、ナンシーをつき飛ばしたんです」

おれは驚いてグローバーを見た。グローバーがおれをかばおうとするなんて信じられない。グローバーはドッズ先生を死ぬほど怖がつてるのに。

先生に生まれて、グローバーのうっすらひげの生えたあごが震えている。

「それはちがうでしょう。アンダーウッド君」先生がいった。

「だけど——」

「あなたは——ここに——いな——さい」

グローバーは絶望しきった顔でおれを見た。

「だいじょうぶだって」おれはグローバーにいった。「かばってくれて、ありがとな」

「わかっているわね」ドッズ先生はきつい口調でいった。「さあ」

ナンシーがほくそ笑んでいる。

おれは「あとで殺してやる」視線の豪華版でナンシーをにらんでやった。ドッズ先生のほうをむくと、先生はそこにいなかった。先生はもう階段のいちばん上、美術館の入り口に立って、いらいらして手まねきをしている。

どうやってそんなに早く移動したんだ？

こういう経験なら今までに何度もあった。脳が眠るかなんかして、はっと気づくと何かを見逃している。パズルのピースの一個がこの宇宙からふと消えたあと、それがあつた場所をじつと見つめているみたいな感じだ。カウンセラーの先生によると、それはADHDの症状で、おれの脳がまちがった解釈をしているらしい。

ほんとうにそうかどうかはわからない。

おれはドッズ先生のあとを追った。

階段を半分くらい上がったところで、ちらつとグローバーのほうをふり返ってみた。グローバーは青ざめた顔で、視線をおれからブラナー先生、ブラナー先生からおれ、と忙しく

動かしている。ブラナー先生、この騒さわぎに気づいてください、って感じた。けど、ブラナー先生は小説にむちゅうだ。

おれは階段の上に目をもどした。ドツズ先生の姿がまた消えた。今度はもう美術館の中だ。玄関げんかんホールの奥おくにいる。

なるほど。売店でおれに、ナンシーのためにシャツを買わせるつもりだな。

けど、実際はそうじゃなかった。

ドツズ先生はどんどん美術館の奥のほうまで進んでいく。おれがやっと追いつくと、そこはさっき来た古代ギリシャ、古代ローマの部屋だった。

この部屋にはおれとドツズ先生だけだった。

ドツズ先生は腕組うでぐみをして、古代ギリシャの女神像が彫ほられた大きな大理石の壁かべの前に立った。先生はのどの奥から不気味な声を出している。犬がうなっているみたいだ。

その声がなくてもおれは不安だった。先生とふたりきりなんて、とくにドツズ先生みたいな相手とふたりきりなんて、それだけで不気味だ。先生がその大理石の壁を見る目つきなんて、これを粉々にしてやりたい、って感じ……。

「あなたにはずいぶん手こずらされてきた。わかっているわね」ドツズ先生はいった。身の安全のために「はい、先生」とこたえた。

先生は革のジャケットのそで口を引っぱつてのばした。「本気で逃げられると思つていたの？」

先生の目つきは怒りをとおりこしている。悪人の目つきそのものだ。

この人は先生じゃないか、とおれはびくびくしながら考えた。おれに危害を加えるはずがない。

「おれ——もつとがんばります」

雷鳴に美術館が震えた。

「私たちはバカじゃないのよ、パーシー・ジャクソン。遅かれ早かれ、あなたは見つかることになっていたの。白状なさい。そうすれば、そう痛い目にはあわせないから」

なんのことをいつてるんだ？

思いあたるのは、おれが寮の自分の部屋でこっそり売っていたキャンディーの隠し場所がばれたのかな、ってことくらい。いや、ひよつとしたら、おれが課題の『トム・ソーヤ』を読まないで、インターネットから感想文を写したのがばれて、落第させるつもりかも。運が悪ければ、『トム・ソーヤ』を読め、つていわれるかも。

「どうなの？」先生がうながした。

「先生、おれ、べつに……」

「時間切れよ」きつい口調でささやくようにいう。

不気味としかいいようのないことが起こった。先生の両目が、赤く燃える炭のように光りはじめた。手の指がのびてかぎづめになり、革のジャケットは溶けて大きな革の翼になった。先生は人間じゃなくなった。コウモリの翼とかぎづめを持ち、口には黄色くどがった菌の並ぶ、しわだらけのばあさんになって、今にもおれをぼろきれのように引き裂こうとしている。そのとき、もつと奇妙なことが起こった。

ついさっきまで美術館の外にいたはずのブラナー先生が、車椅子を動かして部屋の入り口から入ってきた。手にはボールペンを持っている。

「パーシー、突撃だ！」ブラナー先生はそう叫び、ペンをほうった。

ドッズ先生がおれに飛びかかってきた。

おれは短い悲鳴をあげてかわした。かぎづめが、おれの耳のすぐそばの空気を切り裂いた。おれは宙を飛んできたボールペンをつかんだ。けど、手にあたった瞬間、それはボールペンじゃなくなった。剣だ——ブラナー先生の青銅の剣。先生が勝ち抜き戦のときにいつも使っているやつだった。

ドッズ先生がくるとおれのほうにむき直った。殺人鬼のような目つきだ。おれは膝がぐくぐだった。手もぶるぶる震えて、剣を落としてそう。

ドッズ先生がうなるようにいった。「死んでおしまい！」

そして、飛びかかってきた。

いいようのない恐怖がおれの体をつきぬけた。たったひとつ、頭に浮かんだ行動をとるしかなかった。剣をふりあげた。

ふり下ろした青銅の刃が、ドッズ先生の肩から、すっと体を切り裂いた。まるで先生の体は水でできているみたいだった。シュルルル！

ドッズ先生は扇風機の前の砂の城みたいに、散って黄色い粉になり、そのまま消えた。あとに残ったのは硫黄のにおいと、断末魔の叫び声と、ぞくぞくとする冷氣だけだ。あの赤く燃えるふたつの目が、まだおれを見つめている感じだった。

おれはひとりきりだった。

手の中にはボールペン。

ブラナー先生はいない。だれもいなかった。

おれはまだ手が震えていた。昼に食べたものに、幻覚作用のある毒キノコか何かが混じっていたにちがいない。

全部幻覚だったのか？

おれは美術館の外に出た。

雨が降りだしていた。

グローバーが噴水のそばに座って、美術館の地図を屋根みたいにかぶっている。ナンシーもまだそこに立っていた。噴水に落ちてびしょ濡れのまま、ぶさいくな友だちに文句をいつている。ナンシーはおれに気づいた。「カー先生にむちでお尻をたたかれた?」

おれはいった。「だれに?」

「先生によ、バカ!」

おれは目をぱちくりさせた。カーなんていう名前の先生はいない。おまえ、何いつてるんだと、おれはナンシーに聞いた。

ナンシーはあきれた顔をして、どこかに行ってしまった。

おれはグローバーに、ドッズ先生はと聞いてみた。

「何先生?」

けど、グローバーは返事の前に一瞬考えた。それに、おれの目を見ようとしなかったから、からかっているんだろうと思った。

「ふざけるなよ。こっちはまじめに聞いてんだ」

頭上で雷鳴がとどろいた。

ブラナー先生は、というと、赤い傘の下で本を読んでいる。一步も動いていません、って

感じた。

おれはブラナー先生のほうに歩いていった。

先生が顔をあげた。じゃまされて少し迷惑めいわくそうだ。「おや、それは私のボールペンじゃないか。ジャクソン君、これからはちゃんと自分の筆記具を持ってきなさい」

おれはブラナー先生にボールペンを返した。自分がまだそれを握にぎっていたことに、たった今気づいたくらいだった。

「先生」おれはいった。「ドッズ先生は？」

ブラナー先生はきよとした顔でおれを見つめた。「だれだつて？」

「もうひとりの引率ひしゆの先生です。ドッズ先生です。数学の先生の」

ブラナー先生は眉間みけんにしわを寄せて、前かがみになった。少し心配しんぱそうな顔をしている。「パーシー、ここにはドッズなんていう先生はいないよ。私の知るかぎり、ヤンシー学園にドッズという名前の先生がいたことはない。君、気はたしかかい？」